

二 「日独伊三国同盟回顧」

昭和二十六年八月

齋藤良衛博士稿

日独伊三国同盟回顧

禁 轉 載	執 務 參 考
-------------	------------------

外務大臣官房文書課

序

昭和十五年（一九四〇年）九月二十七日署名された日独伊三国同盟は、太平洋戦争の誘因の一つであると一般に見られている。

本調書は、三国同盟締結の真相、特に松岡外相の意図、交渉の経緯、その背景をなす国内事情等について通曉して居られる当時の外務省顧問法学博士斎藤良衛氏に執筆を委嘱したものである。

本調書は、特に貴重な史料と思われるので、省内執務参考として将来に残すため、ここに印刷に付する次第である。その内容機微にわたる箇所が多いから、取扱に注意せられたい。

昭和二十六年（一九五一年）十一月

外務大臣官房文書課長

三宅 喜一郎

日独伊三国同盟回顧

目次

緒言	一
第一節 最初松岡は強硬な反独親米論者	五
第二節 何が松岡を三国条約締結を持つて行つたか	七
第一項 松岡の特異な性格	七
第二項 三国条約締結当時一般の情勢	一四
第一 日本の海外発展の絶対必要性と軍人の外交関与	一四
第二 海外発展の方向と手段に関する軍部と文官グループとの確執	一六
第三 我海外貿易の行詰とブロック経済思想の抬頭	一六
第三節 松岡の世界政策と東亜共栄圏の構想	一六
第一 世界四大ブロックの構想	一六
第二 東亜共栄圏建設の構想	一三
第四節 三国条約は世界四大ブロック構想実現の手段であつた	一三
第一項 総説	一三
第二項 松岡は何故に最初にドイツと手を握つたか	一四
第一 ドイツの戦勝に対する過大評価と米英の対日圧迫	一四

第二 日支事変解決への松岡の焦慮	一五
第三 陸軍の圧迫	一六
第四 ドイツの日ソ国交調整工作に対する過大の期待	一六
第五節 日独伊三国条約に対する腹藏のない批判	一六
第一項 無準備急ごしらえの条約	一六
第二項 人の和を缺いた外務省(附)松岡人事	一七
第三項 世界四大ブロック構想の矛盾	一七
第一 予想外のイギリスの弾撥	一七
第二 四大ブロック政策の侵略性とブロック互助方針との矛盾	一七
第三 各ブロック勢力圏劃定の永続性缺如	一七
第四 コスモポリタニズムとナショナリズムとの矛盾	一八
第四項 同盟目的の齟齬と松岡の外交政策転換決意	一八
第一 総説	一八
第二 東亜共栄圏構想の非実現性	一八
一 侵略に共榮なし	一八
二 侵略主義に対する文官グループの闘争	一九
(イ) 軍部の侵略方針を暴露した市ヶ谷軍事裁判の記録	一九
(ロ) 侵略主義に対する闘争手段としての松岡内閣の構想	一九
第三 日華事変解決手段としての三国同盟の価値	二〇

一 三国同盟は日華事変解決に多く寄与しない	二〇
二 日華事変解決の唯一の方法	二〇
三 全面撤兵に対する文官グループの努力	二〇
第四 日ソ国交調整の失敗	二一
一 日ソ国交調整に関する軍部と文官グループとの見解の相違	二一
二 ドイツ、日ソ国交調整仲介を断わる	二二
三 ソ連に三国同盟同調を期待したのは誤まり	二二
第五 アメリカの参戦防止の行方	二三
一 ソ連の三国同盟同調の期待が外れて、アメリカの参戦防止の望みを失つた日本	二三
二 松岡洋右外交政策転換を決意	二三
(イ) 総説	二三
(ロ) 三国同盟の事実上の清算と日米防共協定に関する構想	二四
(ハ) 松岡の対ソ戦主張の内幕	二五
(ニ) 第三次近衛内閣から日本は急ピッチに日米戦争を突進した	二五
附 録	
第一 重要国策決定文書及び関係条約	二五
第二 重要事項年表	二六